

# 大学生のアパシー傾向と援助要請の関連

22007FRM 三宅 涼

キーワード：アパシー傾向・援助要請・大学生

## 問題と目的

大学生の無気力（アパシー）については、Walters のスチューデント・アパシー（Student Apathy；以下、S・A）の研究が有名である。S・Aとは無気力の中でも、学生の本業である学業に対してのみ選択的に意欲の低下を示すものである（Walters, 1961 笹原・岡本訳, 1975）。下山（1997）は、臨床群であるS・Aと一般の大学生の無気力は区別される事態であるとした。それに対して、狩野・津川（2011）は一般の大学生の無気力に、持続的な抑うつ気分を伴う無気力（抑うつ的無気力）と伴わない無気力（S・A的無気力）が存在していることを明らかにし、大学生のアパシー傾向の研究において、S・A的無気力群と抑うつ的無気力群を区別して研究することによって、S・A的無気力群とS・Aとの連続性を仮定した研究が実現される可能性を示唆している。したがって本研究では、大学生の無気力をS・Aと抑うつというふたつの視点から捉え、大学生のアパシー傾向について検討することを目的とする。

## 研究1

### I. 目的

大学生の無気力をS・A的無気力群と抑うつ的無気力群に区別が可能であるか検討することと、両群の援助要請規範と自尊感情の程度に差がみられるか検討することを目的とする。仮説は以下の通りである。S・A的無気力群は抑うつ的無気力群より回避型肯定と自尊感情が高いと予測する。

### II. 方法

(1) 調査対象者：X県の私立大学生331人を対象にWEBアンケート調査を実施し、回答に不備が認められなかった大学生289名（男性51名、女性238名；平均年齢18.89歳、 $SD=0.99$ ）を分析対象とした。

(2) 質問紙：①多次元アパシー傾向測定尺度（渡部, 2021）：アンヘドニア、時間拡散、強迫的適応志向の3因子23項目、7件法。②日本版ベック抑うつ質問票II（Beck Depression Inventory-Second Edition；以下、BDI-II）（小嶋・古川, 2003）：認知・感情面、身体面の2因子21項目、4件法。③ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版（桜井, 2000）：単因子構造。10項目4件法。④援助要請規範尺度（橋本, 2020）：依存型、回避型、自立型（本研究では依存型肯定、回避型肯定、自立型肯定とした）の3因子12項目、5件法。⑤フェイスシート（年齢、性別）から構成された。

## III. 結果と考察

クラスタ分析の結果、アパシー傾向と抑うつどちらも高い抑うつ的無気力群と考えられる群は抽出されたが、S・A的無気力群は抽出されなかった。そのため、アパシー傾向、抑うつ、援助要請規範、自尊感情の関連を検討するため、共分散構造分析を行った。結果、抑うつ認知・感情面、時間拡散、強迫的適応志向、アンヘドニアは自尊感情に対して負の影響（順に-.45, -.16, -.13, -.25）を、アンヘドニアは自立型肯定に負の影響（-.22）を、自尊感情は依存型肯定に正の影響（.27）を及ぼすことが示された。S・Aの強迫的適応志向では、自分の弱みを知られることは非難されることだと捉え、回避や否認、分裂によって徹底的に適応的でない自己を排除するため、自尊感情が高まることが考えられるが、強迫的適応志向が自尊感情に負の影響を与えたという結果から、大学生のアパシー傾向における強迫的適応志向は、S・Aほど徹底的ではなく、まずはできない自分を自覚したうえで、他者の意向などに合わせ、そのように、適応的でない自己を自覚していることによって自尊感情が下がるのだと考えられる。また、アンヘドニアが自立型肯定に負の影響を与えていた

のは、相関分析結果より、アンヘドニアの感覚が高まった際に、依存型の援助要請スタイルに対して否定的になり、自立型肯定への援助要請スタイルにも否定的になるため、依存型での援助要請はおろか、自立型での援助要請も認められないと認知している、つまり、少しでも頼ってはいけないと社会的に思われていると認知していると考えられる。反対に、アンヘドニアの感覚が低下すると、依存型の援助要請スタイルに対して肯定的になり、自立型肯定への援助要請スタイルにも肯定的になるため、援助を求めることは良いことだと社会的に思われていると認知していると考えられる。よって、アンヘドニアの感覚は、人に頼ることが社会的に容認されるか否かの認知に影響する要因となりえると考えられる。

## 研究 2

### 1. 目的

大学生の自己効力感と援助要請行動抵抗感の間に、アパシー傾向がどのように関係するか検討することを目的とする。仮説は以下の通りである。一般性セルフ・エフィカシー尺度（坂野・東條, 1986）（General Self-Efficacy Scale; 以下, GSES）の失敗に対する不安,あるいは能力の社会的位置づけは、アパシー傾向測定尺度の強迫的適応志向に正の影響を与え、強迫的適応志向は援助要請行動抵抗感尺度の自立の固執に正の影響を与える。

### II. 方法

(1) 調査対象者：X 県の私立大学生 304 人を対象に WEB アンケート調査を実施し、回答に不備が認められなかった大学生 261 名（男性 82 名, 女性 176 名, その他 3 名; 平均年齢 20.07 歳,  $SD = 1.25$ ）を分析対象とした。

(2) 質問紙：①多次元アパシー傾向測定尺度（渡部, 2021）：アンヘドニア, 時間拡散, 強迫的適応志向の 3 因子 23 項目, 7 件法。②BDI-II（小嶋・古川, 2003）：認知・感情面, 身体面の 2 因子 21 項目, 4 件法。③援助要請行動抵抗感尺度（山本, 2022）：評価への懸念, 対象への不信, 自立への固執の 3 因子 11 項目, 5 件法。④GSES（坂野・東條, 1986）：行動の積極性, 失敗に対する不安, 能力の社会的位置づけの 3 因子 16 項

目, 3 件法。⑤フェイスシート（年齢, 性別）から構成された。

### III. 結果と考察

共分散構造分析の結果, 失敗に対する不安は強迫的適応志向, アンヘドニア, 評価への懸念に正の影響 (.38, .17, .25) を, 行動の積極性は, 時間拡散, 強迫的適応志向, アンヘドニアにそれぞれ負の影響 (-.54, -.21, -.36) を, 能力の社会的位置づけは, 強迫的適応志向に負の影響を与えることが示された (-.14)。時間拡散は自立への固執に負の影響 (-.17) を, 強迫的適応志向は評価への懸念に正の影響 (.35) を, アンヘドニアは対象への不信に正の影響 (.34) を与えることが示された。したがって, 仮説は一部支持された。大学生のアパシー傾向における強迫的適応志向は, S・A ほど徹底的ではなく, まずはできない自分を自覚したうえで, 他者の意向などに合わせると考えると, できない自分の自覚することによって能力の社会的位置づけが低くなるほど, 強迫的適応志向が高くなることが考えられる。また, アンヘドニアのような, 活力のない状態では, 問題の解決に対して諦め, 問題から距離を置くという対処を無意識的にも意識的にも行う可能性が示された。

### 総合考察

本研究にて, S・A 的無気力群と抑うつ的無気力群は確認されず, 調査方法の再検討の必要性が示唆された。また, S・A と大学生のアパシー傾向では, 強迫的適応志向のあり方に質的な違いがあることが示唆され, 大学生のアパシー傾向は S・A よりも援助を要請することに対して回避的でない可能性が示唆された。そして, 強迫的適応志向が, 自尊感情の低下につながるという結果が示され, 自尊感情の低下による心理的苦痛などが生じると考えられる。しかし, アンヘドニアの傾向が高くなるほど, 援助を要請することは甘えであると捉えるという結果から, 自尊感情の低下によってもたらされる心理的苦痛などに悩んでも援助要請を甘えと捉えているため, 相談が出来ない可能性が示唆された。よって, 支援者にとっては, アパシー傾向のある学生に対して, 援助を要請するハードルを下げるのが課題となる。